

「令和」と万葉集

北川和秀

1. 大宰府とは

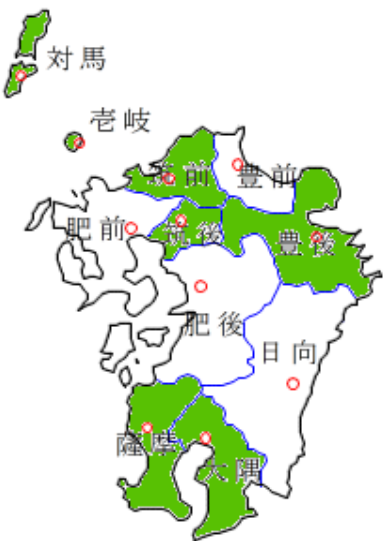
- ①九州に置かれた朝廷の出先機関で、「遠との朝廷みかど」と呼ばれた。
- ②博多湾から南東に十五キロメートルほど入った内陸に位置し、すぐ北の大野山（現在は四王寺山）には大野城が築かれ、西には水城が築かれていた。
- ③大宰府の役目は、九州諸国の行政の統括、外交、国防。
- ④長官は大宰帥といい、官位相当は従三位。奈良時代には大納言または中納言の兼任が多い。中納言で兼任した場合は現地に赴く。梅花の宴の折の大宰帥は大伴旅人。

2. 梅花の歌三十二首とは

- ①天平二年正月十三日に大伴旅人邸で催された梅花の宴でよまれた歌。
- ②この日は現代の太陽暦では七三〇年二月八日に当たる。立春の三日後。
- ③参加者は大宰府の役人と九州諸国の役人、合計三十二名で、一人一首ずつの歌が記録されている。

④参加者

- ・大宰府の官人 17人
- ・造筑紫観世音寺別当 1人
- ・九州諸国の官人 計11人
- 筑前国 4人 筑後国 1人
- 豊後国 1人 大隅国 1人
- 薩麻国 1人 杵岐国 2人
- 対馬国 1人
- ・不明 3人



3. 梅花の歌の序文

○本文、訓読文、口語訳は別紙参照。

4. 帰田賦と蘭亭序

①帰田賦……後漢の官人・文人・科学者である張衡（七八〜一三九年）が作った賦。

『礼記』や『詩経』の影響を強く受けている。永和三年（一三八）の成立か。官職を辞し、田舎の穏やかな自然の中で暮らし、書を読み、文筆に勤しもうという内容。六世紀に編纂された『文選』に収録されている。

② 蘭亭序……東晋の時代、永和九年（三五三）三月三日に、王羲之は名士を蘭亭（浙江省紹興市の南西にあった亭）に招き、四十二名で曲水の宴を開いた。その時に作られた詩二十七編（蘭亭集）の序文として王羲之が書いたもの（草稿）。書の名品として知られる。

③ 蘭亭序と梅花宴序とは趣旨が共通。

・永和九年、歳在癸丑。暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭。脩禊事也。（蘭亭序）
 （永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事を脩むるなり。）

・天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也。（梅花宴序）

（天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。）

④ 蘭亭序と梅花宴序とは字句の似た部分もある。

・是日也、天朗氣清、惠風和暢。（是の日、天朗らかに氣清く、惠風和暢せり。）

・于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。）

⑤ 帰田賦と梅花宴序とは字句のよく似た部分がある。

・於是、仲春令月、時和氣清。（ここに、仲春の令月にして、時和らぎ氣清し。）

・于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。）

5. 『万葉集』の梅

① 『万葉集』によまれた植物ベストテン

1	はぎ（萩）	一四一
2	うめ（梅）	一一六
3	たちばな・はなたちばな（橘・花橘）	一〇七
4	すげ・すが・やますげ（菅・山菅）	七四
4	まつ（松）	七四
6	あし（葦）	五五
7	ち・あさぢ（茅・浅茅）	五〇
8	やなぎ・あをやぎ（柳・青柳）	四九
9	ふぢ・ふぢなみ（藤・藤波）	四四
10	さくら（桜）	四一

② 梅は第二位を占め、万葉集に数多くよまれた植物である

③ ただし、植えられている場所は、大宰府や平城京の貴族の庭園などに限られている

④ 東歌には全くよまれていない

⑤ 梅は中国からの渡来植物で、まだ広く普及していたわけではない

⑥ 時代的には奈良時代以降

⑦ 花の色が分かる梅は白梅。香りをよんだ歌は極めて少ない

6・飛鳥・奈良時代の元号

年号	改元年月日	改元の契機	背景	典拠
大化	大化元・六・一九 (六四五)		大化改新	未詳「王者布 <small>ニ</small> 大化 <small>一</small> 」(『宋書』 卷21)か
白雉	白雉元・二・一五 (六五〇)	穴戸国が白雉を 献上		
朱鳥	朱鳥元・七・二〇 (六八六)		天武天皇の病氣 平癒を願ってか	
大宝	大宝元・三・二一 (七〇一)	対馬が金を献上	大宝令施行のた め	
慶雲	慶雲元・五・一〇 (七〇四)	西楼の上に慶雲 出現		
和銅	和銅元・一・一一 (七〇八)	武蔵国秩父郡が 和銅を献上	前年に元明天皇 即位	
靈龜	靈龜元・九・二 (七一五)	左京職が靈龜を 献上	元正天皇即位と 同時に改元	
養老	養老元・一一・一 七(七一七)	美濃国当耆郡の 靈泉に行幸		
神龜	神龜元・二・四 (七二四)	前年に左京職が 白龜を献上	聖武天皇即位と 同時に改元	
天平	天平元・八・五 (七二九)	左京職が背に 「天王貴平知百 年」という文字 のある龜を献上	二月に長屋王の 変。八月十日に 藤原光明子を皇 后とする	龜の背の「天王 貴平知百年」

延暦	天応	宝亀	神護景雲	天平神護	天平宝字	天平勝宝	天平感宝
延暦元・八・一九 (七八二)	天応元・一・一 (七八一)	宝亀元・一〇・一 (七七〇)	神護景雲元・八・一六 (七六七)	天平神護元・一・七 (七六五)	天平宝字元・八・一八 (七五七)	天平勝宝元・七・二 (七四九)	天平勝宝元・四・一四 (七四九)
	伊勢齋宮に美雲出現	肥後国が白亀を献上	あいついで景雲出現	前年に恵美押勝の乱を平定	駿河国から蚕の作った文字(「五月八日開下帝釈標知天皇命百年息」)を献上		陸奥国が黄金を献上
前年四月に桓武天皇即位	天応元年は辛酉年	八月に称徳天皇崩御。十月に光仁天皇即位と同時に改元	前年に弓削道鏡が法王になる	前年九月に恵美押勝の乱、十月に称徳天皇即位	七月に橘奈良麻呂の変。この年の五月八日は聖武太上天皇一周忌齋会の最終日	孝謙天皇即位と同時に改元。唯一の年二回改元	大仏建立中。初めて国産の金産出
未詳。「民詠」徳政、「則延」期歴」(『群書治要』巻26)か	改元詔の「自天応之」			改元勅の「神靈護」国」			

【本文】

梅花 譚卅二首 并序

天平二年正月十三日

萃于帥老之宅 申宴会也

于時 初春令月 氣淑風和

梅披鏡前之粉

蘭薰珮後之香

加以

曙嶺移雲 松掛羅而傾蓋

夕岫結霧 鳥封穀而迷林

庭舞新蝶

空歸故雁

於是

蓋天坐地

促膝飛觴

忘言一室之裏

開衿煙霞之外

淡然自放

快然自得

若非翰苑 何以攄情

詩紀落梅之篇

古今夫何異矣

宜賦園梅聊成短詠

【訓読文】

梅花の歌三十二首 序を并せたり

天平二年正月十三日、

帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。

梅は鏡前の粉を披き、

蘭は珮後の香を薫らす。

加之、

曙の嶺に雲を移し、松は羅を掛けて蓋を傾け、

夕の岫に霧を結び、鳥は穀に封されて林に迷ふ。

庭には舞ふ新蝶あり、

空には帰る故雁あり。

ここに、

天を蓋とし地を坐とし、

膝を促け觴を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、

衿を煙霞の外に開く。

淡然として自ら放にし、

快然として自ら足る。

若し翰苑に非ざれば、何を以てか情を攄べむ。

詩に落梅の篇を紀す。

古今それ何ぞ異ならむ。

宜しく園梅を賦みて、聊かに短詠を成すべし。

【口語訳】

梅花の歌三十二首 序文を加えた

天平二年正月十三日、

大宰帥の老の屋敷に集まって、宴会を開く。

折しも、初春の良い月で、大気は澄んで風は穏やかだ。

梅は、鏡台のおしろいのように白く咲き、

蘭は、玉佩を着けた人とすれ違ったときのように香る。

さらには、

明け方の峰には雲がたなびき、松は薄物を纏って傘を

差し掛けたようであり、

夕方の山の洞からは霧が湧き立ち、鳥は霧の帳に閉じ

込められて林の中を飛び迷う。

庭には春に生まれた蝶が舞い、

空には去年の秋に來た雁が帰ってゆく。

ここに、

天空を傘とし、大地を敷物としてくつろぎ、

膝を寄せ合って、盃を巡らせる。

一堂に会して、内には言葉も不要なほどに打ち解け、

外には良い景色に向かって襟をくつろげる。

心は淡々として自由であり、

気分は快く満ち足りている。

文筆以外の何によつてこの思いを述べ尽くせようか。

昔の中国には落梅の漢詩がある。

昔と今と、中国と日本と、何の違いがあるうか。

さあ、この庭園の梅を短歌によもうではないか。